

行基の研究

木全一乘

行基は天智天皇が近江の大津の宮で即位した年（六六八年）に河内の大鳥郡家原村に生れ、出家したのは十五才の時である。

當時律令制下に於いて僧尼となる者は上層農民、豪族あるいは學問や仏教に關係の深い氏族等に限定され、すでに出家した僧尼に於いても、僧尼令なる規定の内にし
ばられ、行動の自由は認められていなかった。

行基の出家については中級豪族高史氏に生れ、高史氏

は學問や仏教の文化をそなえた書氏と深い關係にあり、この様な民族的環境に育つたので出家となる道をえらんだのであらうと思われる。行基の受學については「続日本紀」に記されている様に、「初出家、読瑜伽唯識論、即其意」と記しており、諸伝にも行基が瑜伽唯識を學ぶと記されており、行基が瑜伽唯識を學んだ事は認められる。受學に當つての師承、場所は明確に出来ないが、行基の後の社會事業や種々の見解により一応道昭を師として受學を行い思想的に強い影響を受け行基の仏教実践に於ける立場が形成されたと考えられる。行基と戒律の關係については「行基菩薩伝」や「行基大菩薩行状記」には行基二十四才の時、徳光禪師より具足戒を得受すと記されており、天平期を中心に展開された受戒作法が瑜伽論と四分律に基づいて得戒せるものであり、おそらく行基も當時の方式に於いて得戒したものと考えられる。

瑜伽戒は小乗具足戒を律儀戒として包摂するという特異性を有するものであり、行基の実践的基礎をなすものであつて、律令国家が僧尼令に於いて示すような小乗戒律を取り入れつつ小乗戒の立場を無視し、大乘戒の条項

を取り入れつつ大乘戒の立場を無視するものとは、その立場を異にするものである。

行基の思想的な基盤が瑜伽戒の上に求められていた事は明らかであるが、又行基の思想的基盤には梵網戒のとかく救済思想があつたのではないかと思われる。行基がこれらの思想の中よりどの様な立場と実践を見せたかは、「行基年譜」によると、卅七才で家原寺、三十八才高藏院、三十九才峰困寺等の建設がなされておるところから私道場を初めこの頃より行基独自の動きが示されるが、布施屋等を創設して平城京造宮等に伴う役民、運却夫の収容に当つたと考えられる。この様な民間伝道を通じて行基が民衆の中に立つたとする姿を見る事が出来るし、反面僧尼令に基ずく政府との対立並びに弾圧を見る事が出来る。養元年行基五十才の時に出された詔（続日本紀に）

凡僧尼、寂居寺家、受教伝道、准令云、其有乞食者、三綱連署、午前捧鉢吉乞、不得因此更乞余物、方今小僧行基并弟子等、零疊街衢、妄說罪福、合構朋党、焚剥指臂、

歷門仮説、強乞余物、詐称聖道妖惑百姓、道俗擾乱、四民棄業、進違釈教、退犯法令

と記されている。政府は僧尼令により行基の活動を僧尼令違反と弾圧したのであるが、これは行基仏教の律令仏教との本質的相異に基ずくのであつたが、この弾圧は養老元年以後、天平三年頃まで続けられたと考えられる。聖武天皇の大仏造宮に關しての行基への協力の呼びかけさらに大僧正へと政府をして行基に対する態度を変化して来た。一方行基は、これまでの弾圧にも態度の変化を示さずに、仏教者としては本来の立場に立つて人間關係の革新にはたらし、始終一貫した行動を示し、民衆救済に當り、目標は政府への抵抗にあらず、念願とするところは民衆の福祉にあり、民衆と共に生き、人間關係の革新に働いた行基の偉大なる人間性を見る事が出来た。

